

まもなくマリア被昇天祭を迎えます。皆さまお元気でお過ごしのことと存じます。SIGNIS JAPAN（カトリックメディア協議会）のニュースレター、「タリタ・クム」の第3号をお届けします。この言葉は、イエス様が亡くなった少女を生き返らせた時に呼びかけた言葉で、アラマイ語で「起きなさい」の意味です。さまざまな意味で今、神様から私たちに向けられた言葉だと思います。回を重ねるごとに魅力あるものにしていきたく願っています。やっと3号まで刊行にこぎつけました。よろしくお祈りします。

## ニュース 7月1日より新名称「SIGNIS JAPAN（カトリックメディア協議会）」となりました。

更なる活動の拡大と世界に広がる同じSIGNISの仲間との連帯を意識し、従来より使用してきた英文名称と邦文名称を一体化しました。新名称に変更になりましても、皆さまには従来同様のご指導とご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

（旧名称） 日本カトリックメディア協議会（英文名：SIGNIS JAPAN）

（新名称） SIGNIS JAPAN（カトリックメディア協議会）

日常的には「SIGNIS JAPAN」または「シグニス ジャパン」で通したいと存じます。どうぞよろしく！

## シグニス ジャパン役員会及び春の総会開催

5月26日、カトリック多摩教会信徒会館にて2010年春の役員会及び総会が開催されました。役員会では高円寺教会ホームページ委員会の入会が承認され、総会では2009年度の活動報告・決算報告及び承認、2010年度活動計画及び予算案の承認の他、名称の変更が論議され、上記の如く決定されました。これからの活動のSNN（インターネット放送局）については別組織とし、少ない資源で可能な範囲内で実験することになりました。総会終了後は多摩教会の信者さんの手作り料理に舌鼓を打ち、今後の鋭気を養いました。美味しかったです。

## 日本カトリック映画賞を知っていますか？



6月12日、第34回日本カトリック映画賞の授賞式と上映会が川崎市アートセンターで行われました（SIGNIS JAPAN主催）。人は映画に感動するとそれを他の人にも伝えたくります。ところが、いい映画なのに知られることの少ない作品があります。カトリック映画賞は毎年そんな映画の中から1本を選び、賞を贈り紹介しています。今年の授賞作は「風のかたち～小児がんと仲間たちの10年～」。病気や苦しみの中にあっても人は輝く—そんなメッセージが伝わってくる優れた記録映画です。晴佐久神父が語る授賞理由と作品が一つの“福音”となって感動を呼ぶ。これが授賞式と上映会の魅力と言えます。千葉茂樹監督監修のアニメ「こちらたまご応答ねがいます」も同時上映され、満員で入場できない方も出る盛況ぶり。「スクリーンの映像を通して神様の愛が感じられる」、そんな映画に贈られるのが日本カトリック映画賞です。（鈴木記）

映画チームからの

## お薦め映画 『冬の小鸟』

大好きな父親に捨てられ、孤児となった9歳のジニ。たった一人で絶望と向き合い、やがてその運命を受け入れていく、一人の少女の孤独な魂の旅の物語。1975年、韓国ソウル郊外。9歳の少女ジニは楽しそうに笑いながら父親の漕ぐ自転車に乗って新しい服を買いに行きます。父と二人でうれしそうに食事をしながら父のために歌を歌い、父の背中にそっと寄り添うジニ。新しい服を着たジニが旅行と信じて父に連れられて行ったところはカトリックの児童養護施設でした。彼女に一言の言葉もかけず、何の説明もなく、固く閉ざされた門の向こうに去っていく父親の背中……それがジニが最後に見た父の姿だったのです。大好きな父親に突然捨てられるという予想もしなかった状況に混乱し、父親は必ず自分を迎えに来ると信じているジニは周囲に反発しますが、やがて年上の少女スキの力を借りて少しずつ心を開いていきます。しかしそのスキにもアメリカ人夫婦との養子縁組が決まり、ジニはまたもやひとり残されてしまいます。繰り返される絶望のなか、ジニは父親に捨てられたことを受け入れていきます。映画ではここから少女ジニの凄まじいまでの絶望と復活、再生の映像が始まっていきます。9歳の子供の果てしない絶望、やり場のない怒り、押し寄せる孤独の中で自分の運命を受け入れ、たった一人で新たな人生を歩む決意をする9歳の少女の覚悟に心ゆさぶられます。本作は実際にフランスへ養子として渡ったウニー・ルコント監督の実体験から着想された作品です。

香港国際映画祭シグニス賞受賞作品、SIGNIS JAPAN推薦映画

10月9日（土） 岩波ホールにてロードショー

[http://www.hollywood-ch.com/?/p/user.data.ItemPage/work\\_id/15652/](http://www.hollywood-ch.com/?/p/user.data.ItemPage/work_id/15652/)

## ミニミニ メディアリテラシー 「ベン・ハー」

今日は、SIGNISの主要フィールドである「映像」から一つ“読み解いて”みましょう。皆さんもよくご存知の歴史スペクタクル映画に「ベン・ハー」(1959年)というハリウッド映画があります。映画史上、再現はもはや不可能とまで言われたあの手に汗にぎる戦車競争のシーンなど、アカデミー賞11部門受賞という快挙は公開されて半世紀以上というのにまだ破られていない不朽の名作です。ところでこの超大作のタイトルに副題がついているのをご存知ですか。『Ben-Hur:A Tale of the Christ』、「ベン・ハー：キリストの物語」です。古代ローマ帝国の支配下にあったユダヤの名門ハー家の息子ユダ・ベンの人生は主キリストの誕生と十字架上の死、そして復活と軸を一にして展開していくのです。友情、愛、裏切り、憎悪、復讐、そして「ゆるし」という人生のタペストリーは、キリストの「救世のみわざ」を中心に織り成されていきます。アメリカの南北戦争時、南軍の将軍だったルー・ウォレスによって1880年に書かれたこの「ベン・ハー」はその後演劇でも取り上げられ、映画化も3度されるなど大ヒット作となりました。作者は聖書をよく読み込んで原作を執筆しています。十字架上のキリストが、奴隷だった自分に水を飲ませて死の淵から救ってくれた人だと分かったベン・ハーは、必死に駆け寄り酔にぶどう酒をませた海綿をつけた棒でキリストの唇を潤そうとします。これなどは聖書の4福音書すべてに照応する部分(マタイ27.48-49、マルコ15.36、ルカ23.38、ヨハネ28-30)で、キリスト者ならすぐに思い出す箇所です(映画では、チャールトン・ヘストン演じるベン・ハーが十字架を担って倒れたキリストに水桶を差し出すシーンに変更しています)。いづれにしてもこの大作は「キリストの物語」と副題にあるように、キリストの「生涯」という太い縦軸を中心にして作られた映画なのです。何度かテレビでも放映されましたが、映画解説者の故M・Hさん(耳の大きな、おひげのおじさんです)が、「男の友情と戦い、そして愛」とこの映画を紹介していましたが、副題についてひとことの言及もなかったのは残念でした。この副題なしには「ベン・ハー」は語れません。映像の制作や内容は当然ながら大切です。しかしその真意を的確に見抜き、“読み解き”、受け手に正確に伝える“読み解き手”の役割も、同様に重要です。今、映像メディア、デジタルメディアの本格的な到来を迎えて、この「読み解き手」の使命が私たちに課せられているのかもしれない。心の耳を澄ませば、神様からの優しい声が一人一人に聞こえてくるはずで、「タリタ・クム(起きなさい)」と。

## 会員紹介

マザー・テレサに導かれて

鵜飼 清



1981年3月に新宿の小田急百貨店で『マザー・テレサ その人と愛』という写真展をやっていました。ぼくは三省堂書店に寄って帰ろうとした時に、マザーの顔写真に引きずられるようにして写真展に入りました。その時、この女性がどんな女性なのかぜんぜん知りませんでした。路上で病気に倒れた男性を運んでは、治療をする。すでに手遅れの者もある。なのに、なぜこの女性は、こんなことをするのだろうか、と不思議に感じました。最初はナイチンゲールのように、看護婦なのかとも思いました。しばらくすると、路上で倒れている男性が、その時の自分と二重写しになってきたのです。この女性は、スゴイ人だな、このせちがらい世の中に、こういう働きをしている人がいるのだ。ぼくは、頭から水をかけられたようなショックを受けました。仲間とつくった出版社で行き詰まり、悩んでいたぼくは、マザーの働きから「愛」を知ったのです。そしてしばらくして、白井隆之社長の燦葉出版社に迎えてもらえることになりました。編集長は大見寿夫さんでした。燦葉出版社はキリスト教書を刊行していて、1981年4月に『マザー・テレサ 神の愛の奇跡』(デスモンド・ドイグ著-岡本和子訳)の本を出すことを知りました。ぼくは、マザーによって、キリスト教へと導かれていったといえるでしょう。結婚してから独立して「編集工房パピルス」を夫婦でつくりました。そして、オリエンズ宗教研究所で石井祥裕編集長と一緒に、月刊誌「福音宣教」の編集させてもらいました。それから有限会社「パピルスあい」を鵜飼恵里香・大塚典正とぼくとの三人で設立しました。出版社をつくり、千葉茂樹監督の『映画で地球を愛したい-マザー・テレサへの誓い-』を2004年に刊行させていただけたのは、この上もない喜びでした。SIGNIS JAPANへの関わりは、千葉監督から声をかけていただきました。マザーの言葉「わたしたちは大きなことはできません。ただ、小さなことを大きな愛でするだけです」を胸に、SIGNIS JAPANのささやかなお役に立てれば幸いと思っています。

## SIGNIS JAPANとは

SIGNISとは世界140ヶ国に広がるカトリックのメディアに携わる人々の世界組織です。平和文化の促進、人間の尊厳擁護、子どもの権利擁護が近年のテーマです。司祭、修道者、一般信徒が参加しています。映画、放送、視聴覚、最近ではインターネットを活用した福音宣教に力を入れています。日本ではサンパウロ、女子パウロ会、中央協広報のほか、ボランティアの信徒が活動しています。カトリック映画賞、インターネットセミナーのほか、これからはインターネット放送局への取組みなど、さらに活動の幅を拡げていきたいと考えています。



第34回日本カトリック映画賞の授賞式で幸田司教からトロフィーを受け取る伊勢監督



インターネットセミナー

## 賛助会員になってください！

私たちの活動をサポートしてくれる賛助会員を募集しています。年会費は一口3,000円。ご入会いただける方は、氏名、住所、連絡先を下記にお知らせください。年会費およびご寄付は、下記銀行口座、または郵便振替口座にお振り込みをお願いいたします。

銀行振込 三菱東京UFJ銀行 六本木支店

普通 1679019

SIGNIS JAPAN 代表 千葉茂樹

郵便振替 口座番号：00100-0-534547

口座名称：SIGNIS JAPAN

連絡先：〒107-0052 東京都港区赤坂8-12-42

聖パウロ女子修道会内 SIGNIS JAPAN

info@signis-japan.org <http://signis-japan.org/>